

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 12 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23760573

研究課題名(和文) 観光施策に基づく都市建設構想と都市基盤形成の近代的展開

研究課題名(英文) Modern Urban Construction and infrastructure formation as the basis of tourism development

研究代表者

山口 敬太 (Yamaguchi, Keita)

京都大学・工学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：80565531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代都市計画と観光施策に基づく都市形成が急速に進んだ大正・昭和初期において、「観光」を都市戦略として掲げ、景勝地開発に取り組んだ都市を対象として、観光地形成の成立過程とそのメカニズム、都市基盤整備の具体的内容を明らかにした。具体的には、神戸背山の山地開発と風致保護の顛末、奈良・山辺の道における道の形成と観光形態の成立、堺大濱における海浜リゾート開発とその経緯について明らかにした。これにより、戦前の観光地形成における、鉄道や道路などのインフラ整備の影響、観光施策上の公園緑地の戦略的拠点性、その整備における行政や民間の各主体が果たした役割を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In 1920-30's many cities in Japan held up "Tourism Development" as an urban strategy, and tried to form a modern city and improve scenic areas. This research took up the cases of Kobe, Nara and Sakai city and clarified the formation process of their tourism development, and the mechanism of it, and concrete contents of their urban improvement projects. Concretely, this research clarified a conflict between scenic development and preservation in Rokko mountain at the back of Kobe, and the process of re-discovery and formation of "ancient route" of Nara Yamanobe, and the formation process of urban sea resort of Ohama in Sakai city. This demonstrated the impact of infrastructure as rail and road on tourism development in 1920-30's, and the significance of parks and green area for urban strategy, and roles of players as both local administration and the private sector in the scenic improvement.

研究分野：都市形成史

キーワード：公園緑地 景観・デザイン 都市計画史 土木史 観光

## 1. 研究開始当初の背景

都市は、そこに生きる人々の社会的要求により、物質的側面を満たす形で姿を変えていく一方で、それぞれの時代に生きる人々の理想や観念、潜在的な都市認識などに影響を受けて姿を変えていく。都市景観の成り立ちを検証するためには、景観そのものの変遷を明らかにするのみならず、この変化を引き起こす人間の意思やイメージについて考究することが不可欠である。この両者を、事例をもとに丁寧に検証することは、都市形成のメカニズムを解明する手掛かりとなる。

昭和初期は、鉄道省の外局組織である国際観光局の設置(1930)や、国立公園の指定(1934)など、地域活性化策としての観光施策が急速に進展した時期である。さらには都市計画法旧法の制定(1919)を受けて、各都市において都市計画が審議・決定・施行された時期でもあり、日本の都市の形成上極めて重要な時期である。同時期には、国を挙げて外客誘致事業、国際観光事業が推進され、一方で、各都市においては大恐慌下での生き残りをかけて、観光事業の推進とそれに基づく都市基盤整備が行われた。たとえば神戸市(兵庫県)においては、六甲山の風致を活かした道路や公園などの山地開発が進められた。本研究は、これらの観光施策に基づく都市建設構想と都市基盤形成の近代的展開について、どのような目的をもった主体(首長や技師、開発事業者ら)が、どのように都市の将来像を構想し、当時の事業ならびに制度の枠組みのなかで、どのような都市基盤整備を行ったか(行おうとしたか)を検証することを目的とする。

本研究で研究対象として取り上げるのは、大正期から昭和初期にかけての観光施策に基づく都市形成である。各都市においては、大恐慌下での生き残りをかけて、観光事業の推進とそれに基づく都市基盤整備が行われたが、その背景として、都市近郊の山林や水辺の景勝地が、保健や休養の場、風景鑑賞の対象として広く認められるようになり、観光開発や住宅地開発の対象として見なされはじめたことがある。すなわち、良好な景観が地域活性化のための資源として認められ、それを積極的に保全・開発することが都市戦略として重要視されたのであり、その一部は実際に都市計画事業等により事業化された。この動きは第二次世界大戦と戦後の混乱の中でみられなくなる。しかし、当時の社会状況は、観光庁を設け(2008)国内ならびにアジアの国々からの観光客誘致を目指す現代日本の社会状況とも重なるところが多い。この戦前の観光施策に基づく都市建設構想や都市基盤整備は、時代遅れの遺物ではなく、日本独自の景観資源を活かした地域活性化のあり方と方法を示す、すぐれた参照事例として、現代においても学ぶべきところが多いものとする。

これまで、近代の都市形成に関わる既往研究には、都市計画史の分野を中心に多くの蓄積があるが、そのほとんどが東京や大阪、京都を研究対象としており、その他の都市に関しては依然として少ない。また、その対象も市街地を題材としている場合が多く、都市近郊の景勝地における観光地形成、都市形成を研究対象とし、その経緯と形成要因について明らかにする研究は、国立公園や都市計画公園などの公園史研究を除けば十分ではなく、研究上の課題が残されている。

## 2. 研究の目的

本研究は、近代都市計画と観光施策に基づく都市形成が急速に進んだ大正・昭和初期において、観光を都市戦略として掲げ、景勝地開発および宣伝に取り組んだ都市を対象として、その開発構想、ならびに観光振興に資する都市基盤整備の具体的内容とその経緯、観光地の宣伝とイメージ形成などの観光施策と都市形成をめぐる諸相について明らかにすることを目的としている。具体的には、以下の内容についてそれぞれ明らかにした。

- 1) 大正・昭和初期の神戸背山・六甲山における山地開発の構想と経緯
- 2) 奈良「山の辺の道」の成立と景観イメージ形成の近代的展開
- 3) 明治・大正期の堺大濱における海浜リゾート地開発とその経緯

## 3. 研究の方法

主として文献調査による。本研究課題に対し、各時代の都市計画・土木事業については、当時の行政史料や委員会審議録、市会議事録を用いて、また景観評価やイメージについては、観光案内記や文学作品などの文献資料等を用いて明らかにした。

## 4. 研究成果

### 1) 大正・昭和初期の神戸背山・六甲山における山地開発の構想と経緯

本稿は、昭和初期の神戸背山をめぐる開発を取り上げ、その山地開発計画の目的と具体的内容、その立案過程と事業化の経緯、ならびに山地開発に対して起こった風致保護論争の顛末について、各関係主体の動きに着目して明らかにした。その成果は以下の通りである。

昭和5年の六甲山開発計画の発表以後、風致を利用した山地の公園化や住宅地、別荘地、遊興地の開発などの様々な動機に基づき、神戸市会と市当局が一致協力して、道路事業を中心とする積極的な山地開発を推進した。再度公園は、神戸市による塩ヶ原をはじめとする大規模な山地開発構想を背景に開設された。この山地開発の原動力は区・部落有林の無償提供、開発地の売却益の見込み、失業救

済事業による国庫補助と起債許可であった。ここに公共デベロッパーと後に称される神戸市の都市経営手法の源流がみられる。開発案に対しては、全体計画なしの事業の無計画性や風致の破壊が批判を受けた。特に神戸愛山協会（登山団体の代表者ら）が山の風光美の観点から積極的な風致保護運動を展開した。しかしこの運動は市の開発方針を変えるには至らなかった。

山地の風致をめぐる対立が表面化したのは昭和 10 年の水害後であった。兵庫県が災害対策調査会特別委員会の決定を受けて、未だ総合的な開発方針が定められていなかった神戸背山に対して、風致保護と災害防止の観点から山地全域にわたる風致地区指定を計った。県の全山一括指定の主張に対して、神戸市は理事者、市会議員らのほとんどが反対した。都市計画兵庫地方委員会の決定は、特別委員の附託となり、神戸市は風致地区指定の一部除外（保留）に成功した。その直後、市は独自の立場からの権威ある調査として位置づけた後藤収蔵らによる山地調査の結果と具体的な開発区分を発表した。

以上の経緯の詳細を明らかにしたことで、開発計画の立案、推進における各主体間の関係とそれぞれの意図を明らかにした。神戸市が都市計画法（旧法）の枠組みの外で、道路事業を中心に山地開発を進めたのは土地と事業（財源を含む）の決定に関する権限を握っていたからにはほかならなかった。土地所有者となった市が自ら開発事業を行うことに対して、兵庫県は風致地区の指定を通じ、都市計画法（旧法）の枠組み内で山地開発を統制しようとした。この両者の風致に対する見解には大きな相違がみられた。一方、この問題は風致保護にとどまらず、都市建設をめぐる計画および事業の決定権限の所在の問題、ひいては自治の問題を含んでいる。開発をめぐる計画の決定に際しても、その主導権を握るため、兵庫県が災害対策調査会特別委員会を設けたのに対して、神戸市は後藤ら学識者と協力し、神戸市独自の調査や開発区分の計画を権威づけようとした。この権威利用の構図は、神戸愛山協会が本多静六を招致したことにもみられた。以上、各主体の言動を詳らかにすることで、昭和初期における神戸背山の「風致」の利用と保護の実体を示した。

## 2) 奈良「山の辺の道」の成立と景観イメージ形成の近代的展開

本研究では、「山の辺の道」の名称の使用、同ルートの利用の変遷、その再発見的行為の主体と意図、という 3 つの観点から、近代における山の辺の道の形成とその背景について明らかにした。具体的に明らかにした成果は以下の通りである。

「山の辺の道」に関する言説の整理を行うとともに、その名称の使用が大和路叢書刊行（関西急行鉄道、1941）以前にはきわめて限られていた。戦前の同地域の観光対象は官幣

大社や天皇陵・旧跡が主で、三輪・巻向と山麓のコースは皇陵巡拝道路として認識されていた。この皇陵参拝のルートとして定着した道が、昭和初期のハイキングブームの中、関西急行鉄道の前身にあたる大阪電気軌道（大軌）沿線のハイキング道としても宣伝されるようになった。

昭和 16（1941）年の大和路叢書の刊行をきっかけとして、「山の辺の道」という名称が一般的に使用されることとなった。この名称を本格的に使用し始めたのは大阪電気軌道編集掛と大和路叢書の編著者であった。この大和路叢書刊行の背景には、上述した観光需要の増大のほか、大軌の種田虎雄が会社経営と民族意識の確立という 2 つの意図をもって、大和を建国精神の体现の地として捉え、史蹟名勝という観点で「大和を見直す」という考えから、奈良県などと連携して歴史・文化事業を推進していたことがあった。大軌編集掛編集長の新井和臣は大軌嘱託でありながらも奈良県の活動に観光課嘱託として、また奈良県観光連合会の活動に参加として積極的に関わっており、その仕事は一鉄道事業者の文化事業にとどまることなく、奈良県全体の観光事業としての広がりを持つものであった。北島ら大和路叢書の編著者らは三輪・石上間の里道を古代の道の名残として見出し、「山の辺の道」としてルートの推定を行うとともに、北線へと拡張する解釈を行い、これを宣伝した。この古代の道としての「山の辺の道」の再発見的行為が「山の辺の道」の形成の契機となった。

さらに、本研究では、「山の辺の道」における戦前および戦後の景観評価、1960 年代以降の景観保全施策の展開過程と、その景観保全思想を明らかにした。戦前、大和路においては万葉歌や古代の伝説にあらわれた文学や史実のイメージを背景として、山や丘陵の形や谷や原が形づくる景観のなかに風光美が評価されていた。大和路叢書（1941）の刊行により、はじめて「山の辺の道」のルートが示されたのと同時に、伝説や万葉歌にあらわれるイメージと景観の結びつけが行われた。これ以降も、戦後にかけて万葉研究者らを中心に、景観と歌に詠まれた心情が結びつけられ、景観のなかに古代人の心情や「なつかしさ」を読み取る態度はさらに広がりを見せた。「山の辺の道」の形成という視点からいえば、記紀の歴史の中に埋れていた道が、案内書に取り上げられたことを契機として様々な言説や景観表象が生まれ、「山の辺の道」として広く一般に受容されていったといえる。

1960 年代以降の景観保全施策の推進の中では、「山の辺の道」はその道自体を特定できないものの、その歴史的価値が認められ、自然環境と一体として保全対象とされるに至り、また社寺や集落等の歴史的景観を構成する中心的な要素として位置づけられた。特に、「石上・三輪地区」の歴史的風土保存区域の指定にあたり開催された歴史的風土審議会

の議論のなかでは、学術的根拠はないながらも、記紀や万葉集に表れたイメージによって構成された「精神的景観」を重視するという方針がとられた。歴史的風土の保存の文脈のなかで、歴史的資産の実体ではなく、文学や史実などにみる人文景観と自然景観とが一体をなした景観が「精神的景観」として捉えられ、この精神的景観を含めての保存策が講じられた。この文学や史実と自然景観との一体性、すなわち「精神的景観」は、戦前から様々なメディアによって新たな景観価値として発見され、集約されてきたものであった。

### 3) 明治・大正期の堺大濱における海浜リゾート地開発とその経緯

堺大濱では、明治半ば以降、堺市および阪堺電気軌道株式会社による公園地経営が進められてきた。本研究では、堺市会決議録・会議録や大阪毎日新聞堺周報ならびに関連する資料をもとに、これらの主体による堺大濱の管理と経営の変遷、さらにはそれによって作り出された海浜リゾート空間の形成過程について明らかにした。具体的に明らかにした内容は以下の通りである。

堺市は、市町村制施行直後より、堺公園地の市への移管を大阪府に稟請し、その貸地代を堺市の収入とするともに自治的な公園経営を積極的に求めた。明治 29 年より陸軍省の旧砲台地(官有地)を借り受けて市営の遊園地として経営を開始し、公園施設の完備にあたった。その後、明治 36 年の内国勸業博覧会を契機とする水族館および水族館庭園周辺の整備と隣接地への公園拡張を進めた。水族館庭園の設計は造園の大家、福羽逸人に依頼し、予算上の制限から仏蘭西式庭園を採用した。この頃から堺市において公会堂や商品陳列所の設置が構想され始め、大西堺市長も大濱公園の整備を堺市全体の盛衰に関わる事業と位置づけるなど、商工都市としての発展、物資の集散地としての地位回復を目指す堺市において、公園は中心的な集客施設として位置づけられた。

明治 30 年代以降、南海鉄道が経営する濱寺公園との客の奪い合いが激化し、大濱公園の衰退による堺市の衰退を危惧した堺市会はさらなる公園拡張と整備の充実に努めようとしたが、堺市の財源不足により公園改良の進捗は遅れ、そのようななか、南海鉄道と旅客誘致上競合する立場となる阪堺電気軌道株式会社(明治 43 年設立)が公園経営への参画を願い出た。このとき、堺市は、両社の競合関係を利用し、公園施設の設計案を自ら作成する立場となるように交渉を進め、堺市の施設計画案に阪堺電車が出資するような形で契約を結ぶことに成功した。その後、阪堺電車は、公会堂、潮湯、商品陳列所など、市の中核的施設を積極的に建設し、運営した。公会堂と潮湯の設計を当時の日本を代表する辰野片岡事務所に依頼し、和洋折衷の様式のなかに個性豊かですぐれた建築的意匠の

実現を図り、近代海浜リゾートとしての空間の実現を果たした。しかしその直後に大濱北公園の整備などをめぐって堺市会と阪堺電車の関係が悪化し、大正 4 年には公園設備運営の委任契約は解除されることとなった。

### 5. 主な発表論文等(研究代表者に下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

【査読付論文 計 4 件】

- ・「近代の堺大濱における海浜リゾートの形成過程」村上理昭, 山口敬太, 川崎雅史: 土木学会論文集 D2, 2015 (予定)
- ・「神戸市河川沿緑地の形成とその構想の起源 -古宇田實の水害復興構想とその戦災復興への影響-」山口敬太, 西野康弘: 都市計画論文集(一般研究論文), Vol. 49, No. 1, pp. 128-139, 2014
- ・「奈良・山辺の道における景観保全の展開とその保全思想」山口敬太, 繁田いづみ, 川崎雅史: ランドスケープ研究(オンライン論文集), Vol. 7, pp. 1-8, 2014
- ・「近代における奈良・山辺の道の形成とその背景」山口敬太: ランドスケープ研究(オンライン論文集), Vol. 6, pp. 25-32, 2013
- ・「昭和初期の神戸背山における開発と風致保護: 山地開発論争と風致地区指定問題の顛末」山口敬太: 建築学会計画系論文集, 第 77 巻 第 682 号, P. 2771-2780, 2012

〔学会発表〕(計 4 件)

- ・「大屋霊城の公園系統の思想と戦前期大阪公園計画との関連性」八尾修司, 山口敬太, 川崎雅史, 景観・デザイン研究講演集, 第 10 回, 大阪, 2014 年 12 月
- ・「戦前期大阪における公園道路の計画思想: 南大阪公園道路網と桃ヶ池公園道路を中心に」八尾修司, 山口敬太, 川崎雅史, 土木史研究 講演集 Vol. 33, pp. 287-296, 仙台, 2013 年 6 月
- ・「戦前の阪神運河計画について-戦前の都市形成における位置づけ-」中条匡臣, 山口敬太, 川崎雅史, 土木史研究 講演集 Vol. 33, pp. 319-324, 仙台, 2013 年 6 月
- ・「昭和初期の天津市における湖岸埋立と街路網の形成 -遊覧都市の建設をめぐって-」田中倫希, 山口敬太, 川崎雅史, 土木史研究発表会, 第 31 回, pp. 25-35, 東京, 2011 年 6 月

〔図書〕(計 1 件)

- ・『日本風景史』田路貴浩, 齋藤潮, 山口敬太編, 昭和堂, 2015

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

山口 敬太 (YAMAGUCHI, Keita)  
京都大学・大学院工学研究科・助教  
研究者番号: 80565531